

Gerstmann-Sträussler-Scheinker病における嚥下障害

研究分担者: 福岡大学医学部 脳神経内科学 坪井義夫

GSSにおけるVideofluoroscopyによる経時的嚥下機能評価

- ◆ GSS患者において経過中に嚥下障害がみられるが、嚥下障害の特徴や経過を報告した研究はされていない
- ◆ 嚥下障害の特徴を明らかにし、早期に誤嚥予防の対策を行うとともに、GSS重症度基準及び診療ガイドラインの重要な項目として位置付けることが必要である

初回検査時

翌年検査時

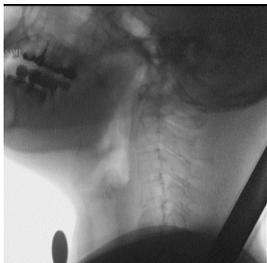
患者の発症年齢・罹病期間

症例1

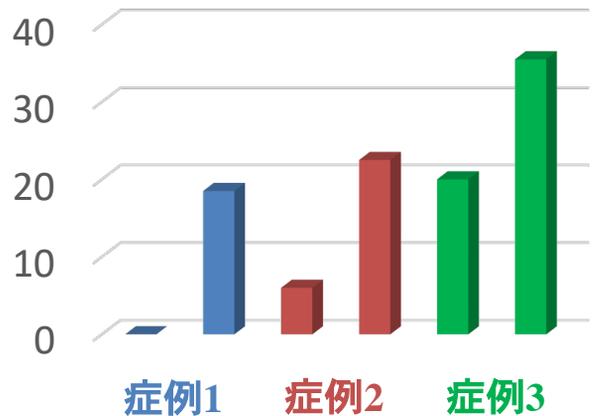


	症例1	症例2	症例3
発症時年齢	51歳	55歳	35歳
初年度評価時における罹病期間	4年	4年	4年

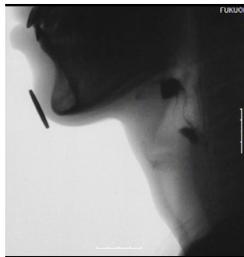
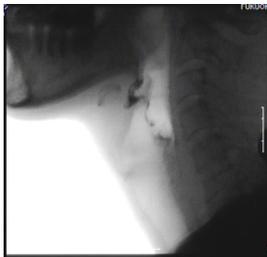
症例2



VFスケール(3食種合計)の経時的変化
(初年度および翌年のVF総スケール)



症例3



解説

1. 初回VF時の3名のVF平均総スコアは8.7点、2年目は25.5点であった。
2. 共通して障害されていた項目は梨状窩の残渣であり、口腔内での食塊形成、口腔期での早期食塊口頭侵入、口腔期時間延長、口腔反射遅延、喉頭蓋谷の残渣の項目でも加点がみられた。